

---

# 君に出会えたこと

桜羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に出会えたこと

### 【コード】

N6880H

### 【作者名】

桜羽

### 【あらすじ】

“君がいることのもっと”の桜羽と那音の短い続編です。 あの

日からもう、4年の月日がたちました ……。

(前書き)

“君がいることの全て”

を読んでいないと

たぶんなんとなく意味がわからないと思います。

少しでも“君がいることの全て”目に通してくれれば幸いです。

「桜羽。帰ろう?。」

愛しい声が私の名前を呼んだ。

「な、那音…待ってて」

あの日からもう4年がたった。

私たちは高校三年生だ。

健太はあのあと、早めに転校してしまった。  
私に最後に涙を見せながら、“大好きだ”って言って…。

その健太を見て、私も思わず涙を流してしまった。

今は全然連絡をとっていない。

きっと私なんかよりもいい人と出会っているはずだ。

「那音、いつ」

私と那音は

同じ高校に入って、毎日一緒に帰っている。

相変わらず方向は違うけど、那音は送ってくれた。

そして

「…もうすぐ卒業か」

「そうだね…」

もう、卒業の時期だった。

「桜羽は、卒業したらどうすんの？」

「んー…短大…かな」

「……………そかあ」

まだハッキリ決まったわけじゃない。

だけど、まだやりたいことと見つからないし、ゆっくり探したいから……。

「那音は？」

「俺？就職しちゃう」

……就職っ？！

初耳だった。

「……な……なんで?!」

大学行ってくつて、高校一年のときに言ってたのに。

「なんでだと思っつ？」

那音はにこっと笑って私に問いかけてきた。

な、なんでって言われても。

わかんないよ……。

「わかんない……」

「……やっぱりな」

「……お、教えてよ!!」

教えてくれる気配がない那音。

そんな那音に私はぶくつと頬を膨らませた。

「卒業式に教えてやるよ」

そう言って那音は私の頭にポンと手を乗せた。

「……わかったあ」

「よしよし いい子」

子供扱いしすぎっ。

私は深く考えず、卒業を待つことにした。

「っうー…光奈あ…りっちゃんっ……瑠架あ」

私は涙でボロボロだった。

光奈たちも同じ高校。

残念ながら麻樹は違う高校だ。

今日、

私たちは卒業した。

「桜羽泣きすぎだからあ。うちらまで……」

光奈が私を見て涙を流した。

いっぱいいっぱい

一緒にいた友達。

好きだよ。光奈。瑠架。りっちゃん。

「りっちゃん……。私に一番最初に声をかけてくれてありがとう……。……」

ずっとずっと恥ずかしくて言えなかった。

りっちゃんへの感謝の言葉。

「……うん。桜羽といれて楽しかったよ。幸せにねっ」

りっちゃんは私に涙を見せた。

「……っっっ」

卒業、したくないよ。

離れたくないよ。

「おい。集合写真だつて！！集まれー！！」

那音が私たちを呼んだ。

しかし、瑠架とりっちゃんは違うクラスだ。

「じゃあうちら行くね」

「うん」

そう言つて、ふたりは教室に戻つていった。

「桜羽、俺の隣」

そう言つて那音は私の肩を引き寄せた。

「っ……」

かああと顔が熱くなる。

「撮るぞー！！」

担任が声をかけた。

「3年2組ーっ？」

「「大好きーっ！！！！！」」

「いい加減泣き止め」

「っ…っ…っ…だって」

那音が私の背中をさする。

「桜羽、中学いっつ」

「…っ…っ…っ！？」

いきなり那音に手を引っ張られ、中学に向かった。

な、なんで中学校？

疑問を抱きながらも

私は那音にひたすらついていった。

「おー懐かしい！！」

「だねー」

久しぶりに見た中学校はなんだかとても懐かしかった。

学校の、におい。

ていつか

勝手に侵入したけど、大丈夫かな…。

大丈夫ではないか。

「さーわ 23R行こ」

「ん、」

2年3組は昔と変わらなかった。

「ここだよな…最初の席」

那音が懐かしそうに一番最初に座っていた席に座った。

私は、その隣だった。

ここで、那音に出会った。  
そして恋に落ちた。

付き合って、別れて。  
苦しくて、切なくて。

だけどその分、今がとても幸せなんだ。

私

ここに転校してきて良かったよ。

那音に出会えた。

これは、偶然なのかな？  
それとも

運命なのかな？

「…桜羽？」

「……………あ…、」

私の瞳からは知らず知らずに涙がでていた。

「…どした？」

那音はいつもと変わらない笑顔で私に問いかけた。

「…っ…ありがとう」

「…え？」

「私と出会ってくれて、本当にありがとう……」

本当はね？

“ありがとう”

なんて言葉じゃ足りないの。

言い表せない。

こんなに人を好きにならせてくれて

ありがとう……。

「俺こそありがとう……」

「っ…うん……」

「……ねえ桜羽」

那音は席を立って、私の前に立った。

「俺が就職する理由はね、桜羽のためなんだ」

そう言って私を抱きしめた。

「…な…なんでっ？」

私のため？

「桜羽が短大卒業したら…一緒に暮らしたいの」

「…え…？」

一緒に、暮らす…？

暮らすって…。

ねえ那音、それって…。

那音は私をまっすぐに見つめた。

「俺と結婚して下さい」

那音はそう言っと、真っ赤な顔で私を見た。

就職の理由…。

私のためだったんだね。

那音…ありがとう…。

「へ、返事…は？」

不安げに私を見た那音。

もちろん、

「ッ…はいつ…」

那音。

那音。

好き。好き。大好き。

私は“好き”に溺れてしまいそうだよ。

私はまた涙を流し始めた。

「おい、泣くなっ」

「だっ…っ…だって〜」

「ほらっ、手」

那音は私の手をとると、左手の薬指にキレイな指輪をはめた。

「…っつえ〜…ありがとうー…」

私は余計に泣きじゃくった。

指にすっぽり収まった指輪。

なんでサイズ知ってるの？

「全然…安いんだけどな。桜羽が…短大卒業したら、桜羽の両親にあいさつしに行く。ちゃんとした指輪、渡すから」

那音は照れたような顔で、私をまっすぐ見て言った。

「…っ…んっ」

夕焼け色に染まる、教室。

私たちが出会ったこの教室で

那音は私の唇にキスをおとした。

そして

初めての言葉を私にくれた。

「……愛してる」

(後書き)

……てことぞー！

結婚

おめでとつございますー！

まだしてないけど…。

続編まで目を通してくれた方、ありがとうございます。  
(^o^)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6880h/>

---

君に出会えたこと

2011年1月13日08時26分発行